伊賀の歴史余話 32

伊賀における盤上の物語
～将棋・囲碁の普及～

ここ数年は藤井聡太八冠の活躍もあって、将棋ブームが到来しています。このような将棋・囲碁などの盤上遊戯が大衆の娯楽として普及したのは、江戸中期以降のことです。

伊賀付の藤堂藩士であった関家には、人々が盤上遊戯を楽しむ様子を描いた一枚の絵が残されています（写真①）。着物に記された名前から、関家当主と「福井」という人物の対局のようです。そして、背後から盤上をのぞき込む人物には「米中（べいちゅう）」とあります。この米中が、関家に作品を残す松阪出身の画家、堀西米中だとすると、対局は米中が伊賀で活動した明治18（1885）年頃のことなのかもしれません。

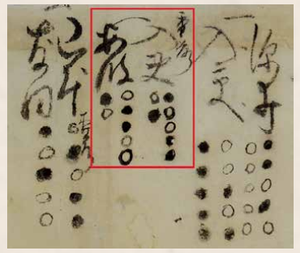
対局が囲碁なのか将棋なのか、勝者がどちらだったのか知る由もありませんが、盤の奥に座る女性の表情は実に楽しげです。

▲写真①（関家旧蔵）

一方で勝負の行方がはっきりと分かる資料もあります。上野相生町の武家屋敷「入交家住宅」には、将棋の星取表が襖（ふすま）の下張りとして残されていました（写真②）。

この文書を見ると、入交のほかに深井・安波といった藤堂藩士と思われる人物らが対局を重ねており、時には棋力に応じたハンデキャップも用いて遊んだようです。

それでは、江戸時代の伊賀で優れた棋士は誰だったのでしょう。享保2（1717）年刊行の『将棋（しょうぎ）図彙（こうかい）考鑑』には、初段から七段まで全国各地の有段者の名簿が掲載されています。そのなかに伊賀上野の商人である菅谷八郎兵衛（屋）・平野谷喜八郎（屋）（いずれも初段）の名前が確認できます。全体として武士の有段者が多いなかで、伊賀では町人層に将棋の達人がいたのかもしれません。


▲写真②星取表の一部
※赤枠内が入交と安波の対局結果。ハンデキャップを示す「香落」の文字が右上部に見える。

文化財課歴史資料係
☎／FAX 41・2271

IGAMONO 伊賀 セレクション No.44

【問い合わせ】 商工労働課 ☎ 22-9669 FAX 22-9695

伊賀ブランド認定品である伊賀牛と、同じく伊賀とよさ豚を合わせて肉ダネにした中華まんじゅうです。自社食品加工場で１個１個、手ごね手包みで製造しています。当商品は、「伊賀牛を手頃に、手軽に」をコンセプトに開発しました。

伊賀牛のうまさは伊賀の人なら知るところ。そこに伊賀とよさ豚を合わせることで、肉まんらしい味わい、肉汁のあふれるジューシーさ、そして、お求めやすい価格を実現しました。冷凍状態から電子レンジ加熱90秒（500W）で食べ頃になるのが実に手軽で、おやつや夜食にできるのもうれしいポイントです。伊賀の外にほとんど出回らない希少なブランド肉の肉まんをぜひご賞味ください。

伊賀牛まん

株式会社伊賀
（ヒルホテルサンピア伊賀）
総料理長　原田　正明さん

ヒルホテルサンピア伊賀は、宿泊施設、天然温泉、レストラン、宴会場・会議室、スポーツ施設の運営を行っています。また、SARAYA（サラヤ）グループとして衛生・環境・健康に貢献する事業を共に推進しています。

地域に愛される企業をめざし、お客様のさまざまなニーズにお答えしながらサンピア伊賀ならではのサービスを提供しており、特に「食」と「健康」の分野に目を向け、地域事業者と提携しながらオリジナルの商品の開発と販売を積極的に進めています。

スポーツの力（ちから）
～する・みる・ささえる～

寒い冬もスポーツを楽しもう
雪がなくても雪合戦ができる？

皆さんはウインタースポーツといえば何を思い浮かべますか。スキーやスノーボードは競技スポーツとしてだけでなく、冬のレジャーとしても多くの人が楽しむ身近なものですが、雪国ではない伊賀でもほとんどの人が経験したことがある「雪合戦」が競技スポーツになっていることをご存じでしょうか。

「スポーツ雪合戦」は北海道発祥で、子どもから大人まで熱中できるスポーツとして国内だけでなく海外にも広がっています。基本的な動作やルールは雪合戦と同じで、雪がない場所や屋内でも替わりにボールを使って楽しめます。皆さんもこの冬にぜひ挑戦してみませんか。

◆スポーツ雪合戦の基本ルール

①雪球に当たらない（当たった人はコート外へ出る）
②雪球を１人でも多くの相手に当てる
③敵陣の旗を取る
④３分３セットマッチ、２セット先取で勝利

相手チームを全員アウトにするか、相手の陣地に立てられた旗を抜いた時点でそのセットは勝利。３分で決着がつかなかった場合は、１人でも多く相手に雪球を当てたチームが勝ちとなります。

（参考：㈳日本雪合戦連盟ホームページ）

詳しくは㈳日本雪合戦連盟ホームページをご覧ください。

【問い合わせ】 スポーツ振興課
☎ 22-9635　FAX 22-9694
✉ sports@city.iga.lg.jp

明日に向かって ～差別をなくしていくために～

人権について考えるコラムです。

アンコンシャス・バイアスを知っていますか？　－秘書広報課－

アンコンシャス・バイアスとは、日本語で「無意識の偏ったものの見方」のことを言います。他にも「無意識の思い込み」「無意識の偏見」「無意識バイアス」などと表現されることもあります。代表的な例としては、「男性／女性は、当然〇〇であるべきだ」などといったものがあります。

昨年８月に内閣府が行った「性別による無意識の思い込みに関する調査」によると、「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」、「女性には女性らしい感性があるものだ」、「女性は感情的になりやすい」といった性別による無意識の思い込みに対する考えについて「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」の合計が男女ともに１位から３位という結果でした。

アンコンシャス・バイアスは、過去の経験や見聞きしたことから自然に身についていくものですが、問題なのは気づかないうちに「普通そうだ」、「こうあるべきだ」といった「決めつけ」や「押しつけ」をしてしまうことです。

アンコンシャス・バイアスがあること自体が問題ということではありません。しかし、気づかずにいると、そこから生まれた言動から相手を知らず知らずのうちに傷つけたり、お互いの信頼関係を損ねたりします。例えば、性別で任せる仕事を決めつけることは、仕事に対するモチベーションを下げることにつながる恐れがあります。私も、知らず知らずのうちに名前を聞いただけで性別を決めつけていることが以前ありました。

このような自分の「決めつけ」や「押しつけ」に気づいたら、ちょっと立ち止まってみてください。頭ごなしに決めつけないこと、相手を尊重する心を持つことが大切ではないでしょうか。

■ご意見などは人権政策課 ☎ 22-9683　FAX 22-9641　✉ jinken-danjo@city.iga.lg.jp へ